

第82回山口西田讀書會

前回(81回、2015年7月4日実施分)のプロトコル

出席者(敬称略、順不同):佐野、来栖、福田、植田、山本、千葉、深野、藤村、桑原、岡田、杉山、
萬納寺、岡部(13人)

●第一部 プロトコル報告(福田)

【1-1-6に関する前回の課題】

自ら差別相を具えている純粹経験だが、判断あるいは意味が加えられるとはどういうことか。判断し、
意味を生じることは純粹経験の範囲か、範囲の外かに関して3つの読み方を整理した。

- 1 純粹経験の外に出ることはできない
- 2 過去の意識と関わることで純粹経験の外にでる
- 3 普通は純粹経験と独立の实在との結合で判断し、意味を生じるが、
純粹経験の立脚地からは外に出ることはない

ここでの解釈は第3説を中心に展開された。意味、判断も「意識系統の中における現在意識の位置を現
わすに過ぎない」ので、「いかなる意識があっても、それが厳密なる統一の状態にある間は、いつでも純粹経
験」であり、統一の有無(強弱)が問題になっていることを確認した。

[質問1]「これに反し」で逆接になっていないか。→その前の「それで、」以降は従前の説明の繰り返し
になっている。

「しかしこの統一、不統一ということも、よく考えて見ると畢竟程度の差である」は、それまでの議論
を無にするわけではなく、「意識の背後」に「変化を含蓄」するかたちで統一的意識が働いているという理
解を確認した。

【1-1-7の説明は自己の範囲を超越しているか】

1-1-7の意味が「自己の範囲を超越するのであろうか」の問いが問題になった。「純粹経験の立脚地より
見れば、同一内容の意識はどこまでも同一の意識」であり、時間的に切れていても一つの者であることか
ら自己を超越していると考え人(YES)、ここでは過去も未来も自己の範囲内でのこととして論じている
にとどまると考える人(NO)に分かれた。

ここで取り扱われている純粹経験が意味、判断を加えない単なる事実をいうのか、意味、判断を含めた
極大の純粹経験をいうのか、どの水準の純粹経験と読むかが問題になった。

(時間切れにより、問題提起まで)

【哲学的問い】(2-2-4)

2-2-4の「独立自全の活動」とは何かを問題にした。そこで、第3章「实在の真景」の冒頭、「主客の対
立なく、知情意の分離なく、単に独立自全の純活動あるのみ」とあるのを確認。続いて主知説の心理学者
を例にあげて批判している第2段落において「意志」を重視し、意識が能動的であると捉えていることを
確認した。

(ここで時間制限の2時40分が到来)

●第二部 第一編第二章「思惟」第1段落からを読む

【1-2-1】

判断が二つの独立した表象の結合ではなく、むしろ一つの表象（全き表象）を分けることで成り立っているという理解を確認。ヘーゲルの論理学における「概念」にも言及があった。

[質問2] 数学における公理とは直覚か？ →すべて直覚です！

[質問3] 純理的判断とは論理的判断のことか？ →そうである。

[質問4] 思想の三法則とは同一律〈AはAである同一性〉、矛盾律〈肯定と否定が共存しない〉、排中律〈Aであるかないか、どちらかでまん中はない〉

[捕捉1] 「故にもし前にもいった様に——」は1-1-2を指す。

ここでは「判断の本（もと）」に注意して読む。「背後」が出てくる場合もおなじ。

【1-2-2】

ここで「思惟の作用も純粋経験の一種である」ことを確認。知覚も構成的であり、思惟も統一の方面より見れば一つの作用である、とある。知覚と夢、幻覚も絶対的な区別はないと述べられている。

[捕捉2] 脳外科医の立場からも読んで違和感を感じない。むしろ最新の研究成果と整合する。

[質問5] 「種々の関係」とは何か？ →ここは問題。ひとまず現実面での整合性としておく。

【1-2-3】

「思惟を進行せしむる者は我々の随意作用ではない、思惟は己自身にて発展するのである」

[質問5] 思惟は判断であるのか、厳密な統一の純粋経験であるのか？ →「全く自己を棄てて思惟の対象即ち問題に純一」となり、「自己をその中に没」するのであるから主客がない。ここでの思惟は純粋経験として述べられている。

[質問6] 思惟とは宇宙的な理性のようなものか？

[質問7] (思惟は) 宇宙の理性というものではなく、朝寝ぼけているときにふわっとアイデアが湧くようなことではないか。

[質問8] 思惟(しい)とは思惟(しゆい)のことであることに気付いた。

※思惟が関係する純粋経験のレベルに受け取りかたのちがいが認められた。

●哲学的問い

知覚と夢、幻覚に絶対的な区別がないなら、思想の三法則などの論理的判断はいかにして成り立つのか。

(筆記：岡部)